
ズキンケア

タナペン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ズキンケア

【Nコード】

N2098Y

【作者名】

タナペン

【あらすじ】

あの有名な童話『赤ずきん』をパロディ……否、リスペクトした作品です。

赤ずきんちゃん！

お母さんに負けるな！

ズキンケア？

「赤ずきんはいるかい？」

「はい。なんでしようかお母さま」

「ああ、いたんだね。ちよっとお使いを頼まれてくれるかい？」

「ええ、もちろんですわ、お母さま」

「ありがとう。あと、私はあなたのお母さまじゃないわよ」

「えっ？ どういうこと？」

「私は、あなたの本当のお母さまではないよ。あなたの本当のお母さまは、あなたを産んですぐに亡くなってしまったの」

「あのー言うタイミングおかしくないですか？」

「私もそう思っただけだね、もうあなたにお母さまと呼ばれるのが嫌になっってきてね」

「心が苦しくなったとか、そういうことではないんですね」

「なんで心苦しくなる必要があるの？」

「いえ、すいません」

「あなたにお母さまって呼ばれるたびにイライラするのよ」

「イライラするんだ」

「イライラするの。更年期障害なのよ」

「なら仕方ありませんね」

「ええ。それで、この果物をおばあちゃんの所まで持って行ってほしいの」

「今の話終わり？」

「そうよ。他に話すことある？」

「いろいろあるような気がしますけど……まあ、いいや。その話は後でゆっくりしましょう。この果物をおばあちゃんの所に持って行くのですね？」

「そうよ。途中、オオカミとかオオカミよりもすごい化け物とか、めっちゃグロテスクなやつとか、お前完全にバイオハザード出てた

だろ？　って思うような奴が出る森があるけど、まあ、大丈夫だから」

「どう大丈夫なんですか？　その森封鎖した方がいいでしょ？」

「まあ、大丈夫よ」

「だから、どう大丈夫なんですか？」

「雰囲気」

「雰囲気かよ。もういいです。森は避けて通りますから」

「そう…あつ、途中でお腹が空くといけなから、クッキーを持って行きなさい…毒入りの」

「毒入ってんのかよ」

「ええ、多少」

「多少でも危ないでしょ！　ていうか、お母さま、私を殺そうとしてません？」

「多少」

「だいぶね」

「まあ、それは冗談よ。気を付けて行きなさい」

「もう。分かりましたよ」

「あら、赤ずきん。ずきんが汚れてるじゃない？」

「えっ？　ホントに？」

「ええ、日頃からきちんとズキンケアしてないからよ」

「そんな、ズキンケアみたいな言い方しなくても」

「ほら、早くズキンを脱いで。洗濯するから」

「ありがとう」

「あらあら、こんなに汚しちゃって。戦争にでも行ってきたの？」

「行ってませんよ。汚れてるイコール戦争行ってきたということにはなりません」

ズキンケア？

「戦争行けばいいのに」

「やっぱり殺そうとしてますね？」

「多少ね」

「だいぶね」

「いい機会だわ、シンデレラ」

「赤ずきんです」

「いい機会だわ、赤ずきん。正しいズキンの洗い方を教えてあげる」

「ホントに？ 教えてください」

「いい？ まず桶にいっぱいのお湯をためます」

「はい」

「そして、我が家特性の洗剤を桶の中にたっぷり入れます」

「ふむふむ。あのーその洗剤には何が入っているのですか？」

「愛情よ」

「へえー愛情が入っているわりに、ずいぶんと目にきますね」

「ツーンとするでしょ？」

「はい。かなりツーンとします。あれ？ お母さまいつの間にかー

グルはめたのですか？」

「私はあなたのお母さまじゃない。っていう話をしてるくらいからよ」

「そんなに早くからはめてたんだ！ 気づけよ私。そしてツツコめよ」

「うふふふ。さあ、もっと近くで桶を見てみなさい」

「嫌です。きつとこれ有毒でしょ？」

「そうよ。なんで分かったの？」

「この一連のくだりで、気付かない方がおかしいでしょ」

「そつえば白雪姫」

「赤ずきんです」

「そういえば赤ずきん。あなたはこのずきんをいつもどのようなように洗っているの？」

「手で洗っています」

「どのようにして？」

「揉むようにして」

「いい？ 洗い方にもコツがあるの。ワイン片手にペルシャ猫を膝に置いてある時のことを思い浮かべてみて」

「そんなシチュエーションになったことないですけど」

「更にゆらゆら揺れる椅子に座っていたらバツチリよ。更にゆらゆら揺れる椅子の前に暖炉があつたらもう完璧よ」

「金持ちのシチュエーションですね」

「そんな時、あなたは膝にいるペルシャ猫をどうする？」

「えっ？ なでます」

「そう、その時のなでている手。そんなかんじでずきんを洗うの」「ぜんぜん分かりませんが」

「分からないなら、お米を研ぐようにすればいいのよ」

「急に庶民的」

「それじゃあやってみて」

「この有毒いっぱいの桶の中に手は入れられません」

「まあまあ、部長そう言わずに」

「私は部長じゃないです。部長もう一杯的なノリで言わないで下さい」

「仕方ないわね。ほら、これを使いなさい」

「普通の桶あるなら最初から出して下さい」

「やってご覧なさい」

「はい……」

「うん。いい筋してるわ。そう、そう。ワンツー、ワンツー」

「けっこう汚れて取れるもんですね」

ズシンケア？

「綺麗に洗ったら、ちゃんと天日干しするのよ」

「はい」

「ほら、元通りの赤いずきんになったじゃない」

「ホントだゝ新品みたい」

「そうね。私も新品になりたいわ」

「どうということ？」

「若い頃に戻りたいってことよ」

「若返りたいということですね」

「そう。お肌もこのずきんのように新品にならないかしら」

「それこそズシンケアに行ったらどうです？」

「そうねゝけど、それだけじゃあ、若返らないわ。やっぱり若いエキスを吸わなきゃねゝ」

「それで私を殺そうとしてたんだ」

「あつ、そうそう桃太郎」

「赤ずきんです。性別変わっちゃってますよ」

「そうそう赤ずきん。帰りにコラーゲンたっぷりのお豆腐を買ってきてちょうだい」

「お豆腐ですね」

「そうよ。今夜はカレーにしましょう」

「お豆腐使わないんですか？」

「カレーにお豆腐を入れるのよ」

「ドロッドロツになると思いますけど」

「なんかカレーにコラーゲンが染み込むかんじがするじゃない」

「するかな？」

「するわよ。いいから買ってきて」

「はい」

「あつ、それとおばあちゃんのとこ行っても『おばあちゃんの耳は

どうしてそんなに大きいの？』なんて聞いちゃダメよ」

「えっ？」

「あと、『おばあちゃんの口はどうしてそんなに大きいの？』なんて聞いちゃダメよ」

「あんた、オオカミとグルだな？」

「まさか」

おわり

「今回はオチがいまいちですね」

「そんなこと言わないの。作者が一番気にしてるんだから。さあ、早くおばあちゃんところに行ってきたな」

「絶対に行きません」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2098y/>

ズキンケア

2011年11月4日13時11分発行